

研究大学強化促進事業に関する意見書の取りまとめ

A:優れている

B:良好である

C:不十分である

1. RU事業(2022年度)の活動について

評価内容	評価	評価者氏名	コメント
(1) 計画に沿った活動状況であるかについて	A	評価者：A	外部環境の変化に合わせて計画変更・組織変更もたびたびあったが、大元の方針である「URAを3部門にわたっての戦略的な支援体制づくり、そしてそれを通じた研究力の強化」という方向性からは逸脱せずに事業を実施してきている。
	A	評価者：B	全体として計画に従った活動状況であると判断する。例えば、昨年伺った重点領域研究（口腔科学）の追加もなされ、公募研究者も competitive な中から選ばれたようである（この研究領域の研究成果として、3つの論文が示されていたが、これらを成果として示すのは間違いであると思う。1つの研究論文を完成させるには、小生の経験では最低でも3～5年、長ければ7年10年とかかるので、これらはこのような成果を出した研究者をメンバーにしましたと判断した）。また、従前からの研究領域からもきちんと成果が出ているようである。
	A	評価者：C	これまで、全体として初期の目標へ向けて、ただし毎年度ごとに適宜、計画をより良い成果が得られるよう修正しつつ進めてこられた。今年度も同様である。
	A	評価者：D	指定国立大学としての研究力強化が着々と進んでいると考える。
	B	評価者：E	学長のリーダーシップのもとRU事業は計画に沿って事業が展開され、外部評価・自己評価に基づいて、組織の改編、新規体制の構築や適正な人員配置なども積極的に進められている。一部、当初目標に達せぬところがあるものの概ね順調な活動状況である。
(2) 事業活動の進捗状況等について（全般的評価）	A	評価者：A	重点領域への注力、AMED 事業費の獲得、若手育成の支援、産学連携の進展、自走化に向けた取組など、全体的には優れた成果を上げていると考えられる。
	A	評価者：B	昨年度は特に若手育成（YISC 計画）の道筋がしっかりと分かったが、今年度は実際に、非常に高い競争の中から、卓越大学院生、次世代研究者ユニット、テニュアトラック准教授が選抜された事がよく分かった。彼らの活躍に期待したい。 また、大学の得意な所を上手に組み込んで TIDE やオープンイノベーションを構築し、成果を出している様子が分かった。 また、TIP が活動を広げている様子が分かった。
	A	評価者：C	各テーマごと（研究力強化、若手研究者支援、先進医療展開、オープンイノベーション）において着実な成果をあげられている。

	A	評価者：D	1. 研究力強化、2. オープンイノベーション、3. その他（研究費獲得支援・自走化に向けた取り組み）いずれにおいても進捗状況は評価できる。
	B	評価者：E	RU事業の活動状況は、学長トップダウンのもと担当理事の適正な指示管理体制により、組織改編や新規インフラの整備が進められ、研究力の強化、若手研究者支援、先進医療の展開、産学連携事業が推進されており良好な進捗状況である。但し、例えば研究力の強化において3つの重点研究領域が設定されているが、各領域に外国人トップ研究者を招請し分野責任者としての配置や、あるいは本学の強みとして設立されたTIDEセンターを中分子核酸・ペプチド創薬の国際拠点化などが実行されることで、研究力強化、若手研究者育成、先進医療展開などにおいて、より具体的な課題解決につながるものと期待する。
(3) 評価(外部評価・自己評価)に基づいた改善がなされているかについて	A	評価者：A	自走化に向けた取組(財務・人事計画、部署間連携)、各ブランチの活動の明示、外国人研究者の増など、それぞれ対応に改善がみられる。なお、女性・外国人比率については一部目標未達の指標もあり引き続き向上に努めていただきたい。
	A	評価者：B	自走化後の財務、人事の明確化がなされていた。URA各ブランチの活動が分かり易くプレゼンされた。外国人教員の割合の説明がなされた。しかし、女性教員も含めて、それを増加させるための戦略が見えなかった。
	B	評価者：C	ほとんどの点は改善されているように思えるが、敢えて辛口の評を言えば、自走化に向けての財源の計画と外国人研究者割合の増加について、説明が少し不十分なように感じられた。
	A	評価者：D	以前からの指摘事項である ①研究力強化：一特に若手支援、医工連携研究 ②研究費獲得：科研費の採択率、大型研究費 ③自走化の取り組み いずれにおいても、良く対応しているものと思われる。
	B	評価者：E	1. 自走化、特にURAに関しては、2023年度を嚆矢とする人事制度改革や、人員の適材配置などが進められている。また、自走化のタイムスケジュールが具体的に生まれ、2027年度にはほぼ運営費支援無しでの自己収入を財源に完全自走化を目指している。この自己収入は間接経費、知財収入、TIP会員費などが主たるものとなるが、具体的な収入見込み内訳が示されず、実現に向けた説得力が必ずしも十分でない。 2. 「臨床研究中核病院の認定」を目指すことは、2013年のRU事業の開始時構想に明確に記載されているにもかかわらず未だその認定に至っておらず、優先課題としての今後の取り組みに期待する。国際水準の臨床研究・治験の実施やARO機能を充実させ革新的医療技術の実用化を促進させるためにも、本学の優秀な人材(リソース)をClinician Scientistとし

		<p>て養成するにおいても、医療系大学として「臨床研究中核病院」は必須のインフラであり、また、ブランドの向上においても重要である。その認定取得を2025年としているが、本学の立ち位置からも優先的課題として取り組むべきでは無かったか？例えば、2021年度には神戸大学病院が、2022年度には順天堂医院が認定されている。また「臨床研究中核病院の認定」は、発達したIoT環境のもとで関連病院との医療連携・人的交流を一層強化し、高度先進医療の普及や医療系産学連携研究の促進、グローバル治験に対応できる「TMDU-関連病院メガホスピタル体制」の実現も期待できる。また、がんゲノム医療中核拠点病院としての整備などへの影響も考慮される。</p> <p>3. 女性教員目標比率の当初目的が30%であったにもかかわらず22%となったこと、また、外国人教員の受け入れの当初目的5%増が4%に、外国人留学生の当初目標20%が18%程度にとどまった。これらの結果がCovid-19パンデミックによる影響だけなのか、さらにその後の回復が見込めるか否かなどの分析も必要であろう。ダイバシティへの対応は国際化とも関係する因子のはずである。</p>
--	--	--

2. URAについて

評価	評価者氏名	コメント
A	評価者：A	部門ごとの配置の明確化、若手教員の育成策や ARO 機能強化と連動した URA 機能の強化など、しっかり取り組んでいると認められる。とりわけ URA 人事制度改革（呼称統一や特定無期雇用の活用）については効果が期待でき、評価できる。
A	評価者：B	現状の問題点を精査し、それを踏まえた人事制度改革がなされようとしている事がよく分かった。
B	評価者：C	真の支援人材としての URA が不足しているように感じられる。とくに、大型研究展開ブランチにおいては、今後の産学連携活動で、いわゆる「営業」を戦略的に行う URA が必要だと思われる。
A	評価者：D	3つのブランチ（研究力強化ブランチ、先進医療展開ブランチ、大型研究展開ブランチ）は、絶妙に配置されており、よく機能していると考えられる。
B	評価者：E	RA に関しては、2023 年度に執行される人事制度改革や、人員の適材配置などが進められており評価できる。役割、役務がより明確になったことで、「職員個人評価」が適正に実施され、個人と組織にとっての PDC A サイクルが連動し URA 組織の一層の positive-spiral な事業推進へと発展させることが望まれ、自走化の自己収入源となる間接経費、知財収入、TIP 会員費などの増収にもつながるものと期待する。

3. URAの活動について

評価内容	評価	評価者氏名	コメント
(1)大型研究展開 ブランチ(研究費 獲得ブランチ)の 活動・実績につい て	A	評価者：A	産学連携プロジェクトの増加、産学連携契約件数や特許活用率の向上など評価できる。資金収入面でも直接経費の増に加え、間接経費も必要額目標をほぼ確保しており、現状は成功していると評価できる。ただし、今後必要となる運営費交付金支援額のタイムスケジュールに沿った減少にはさらにもう一步の努力が必要。頑張ってもらいたい。
	A	評価者：B	TIPの広がりがきちんと見られ、そのBBセミナーへの企業側からの参加者も多い。
	B	評価者：C	科研費、AMEDの獲得は順調だが、創発的研究支援の獲得件数が少ない。これは若手にとって重要な資金だと思うので(また来年度も予算が付くという話もあるので)来年度に期待したい。
	A	評価者：D	科研費非採択決定時点から添削を行い、翌年の採択率の向上を狙うなどの努力をされており、年度別の獲得額の増加傾向があり、このような科研費獲得支援の取り組みは、大変評価できる。またAMEDの大型研究費の獲得状況も華々しい。
	A	評価者：E	大型研究費採択状況(2020-2022年度)の成果は良好であり、その活動・実績を高く評価できる。
(2)研究力強化ブ ランチの活動・実 績について	A	評価者：A	YISCの設立、重点研究領域の推進、AMED研究費の獲得はよく成功している。TIDEなどトランスレーショナル研究も積極的で期待できる。若手支援も熱心。科研費獲得実績がやや頭打ち感があるが、手厚い指導は評価。総合的に見て優れていると評価できる。今後指定国立大学の枠組みの中でしっかりURA機能を維持してほしい
	A	評価者：B	科研費については上げ留まった感があるが、AMED研究費については増加傾向が継続していて大変に結構。かといって、URAあるいは名誉教授などによるチェックが必ずしも効果的か?というところでもない感がある。(確かに、添削群の採択率が高いが、これは添削して欲しいと願う研究者は熱意が違う点も大きいと思う) 再チャレンジ支援が有効のようであるが、ちょっとよく分からなかった。前年不採択者は大勢いると思うが、43件、33件支援と少ないのが分からなかった。
	A	評価者：C	十分な実績をあげられている。
	A	評価者：D	オープンイノベーション(産官学の共創)としてのオープンイノベーション(産官学の共創)、ベンチャー起業を始めとした大型産学連携、エコシステムの構築など、素晴らしい展開である。

	B	評価者：E	<p>研究力強化ブランチによる若手研究者支援では、具体的な取り組みが企画され実績も上がっている。本学の強みに基づいた重点領域の研究体制にも独自性がみられる。特にTIDEセンターと関連した先進医療展開ブランチ支援による「アカデミアによる医薬品製造プラットフォーム新設」では、unmet-needs 解決や希少疾患の克服に向けての発展・実装化において社会的にも大きなインパクトを有している。また、それら取り組みが卓越の若手研究者を育み、さらに、この領域に特化することで、本学の強み、特徴を活かした瞠目の成果が期待され、本学の「骨太」さ「力強さ」の付与にも通じる。</p> <p>トップサイエンスインキュベーション機構は長い時間をかけて学部・大学院生から独立教授までの Clinician Scientist 育成のために構想された独自のプランであると評価できる。ただし、競争の原理に基づいたその長い道のりにおいて、若手研究者たちは、結婚、出産、子育て、介護などの大切なライフイベントに遭遇する年代・時期と重なっており、それらサポートは研究者育成の環境面に大きな効果となるだけでなく、さらに「人のサステナビリティ」を考慮するうえでも看過できない。よって具体的な支援の方策を示すことが望まれる。</p>
(3)先進医療展開 ブランチの活動・ 実績について	A	評価者：A	<p>URA 採用強化は予定通り進捗し、医師主導試験も順調に実施。特定臨床研究の実績も安定。臨床研究を主導できる研究者の育成は重要であり、取組みの進捗に期待したい。現状、所属する URA 人数が多いが、臨床研究中核病院指定申請に向けた要件確保のためと理解。自走化や中核病院指定後も事業縮小しないようご尽力ありたい。</p>
	A	評価者：B	<p>厚労省による臨床研究中核病院の指定に向けた取り組みがなされている。</p> <p>(歯学基礎系の人間なので、厚労省のHPからこのリストを初めて見ましたが、ここにTMDU病院はあるべきだと思う)</p> <p>臨床研究を主導できる研究者の育成プログラムが結実している感がある。継続して欲しい。</p>
	A	評価者：C	<p>臨床研究中核病院の認定を目指してARO強化などに取り組まれている。</p>
	A	評価者：D	<p>臨床研究・治験相談などAROとしての役割を良く果たしていると考えられる。臨床研究中核病院採択に向けて頑張ってください。</p>

	B	評価者：E	「臨床研究中核病院の認定」を目指すことは、2013年のRU事業の開始時構想に明示されている。国際水準の臨床研究・治験の実施や、ARO機能を充実させ革新的医療技術の実用化を促進させるうえで、加えて、本学におけるトップレベルのClinician Scientistを養成するにも、医療系大学（大学統合後は医療系学部）として「臨床研究中核病院の認定」は必須といえる。その認定はブランド的にも医療系総合大学附属病院にとって重要である。認定取得を2025年としているが、例えば、2021年度には神戸大学病院が、2022年度には順天堂医院が認定されており、本学の立ち位置からも最優先課題としてより計画的に取り組むべきでは無かったか。IoT環境のもとで関連病院との医療連携・人的交流を強化し、高度先進医療の普及や医療系産学連携研究の促進、さらにグローバル治験に対応できる人材育成やTMDU-関連病院メガホスピタル体制のインフラの実現や、URA自走化の自己収入財源確保の体制としても重要である。
--	---	-------	---

4. 事業終了後の自走化構想について

評価	評価者氏名	コメント
A	評価者：A	自走化のタイムスケジュール、特に運営費交付金支援の減少目標の設定、一方でOI機構の資金調達における自立的経営財源の増加傾向はいずれも高く評価。 今後は、運営費交付金支援を計画通り減らせるよう、なお一層の自立的経営財源増加に向け、ご尽力ありたい。
A	評価者：B	人事制度、予算両面からきちんと練られていると感じる。 自走化後の自己点検評価の仕組みを伺ったが、よく理解できなかった。時間も無い中での話だったので、理解し難かったと思うが、PDCAサイクルを回してより良く機能するために、URA全体、その各ブランチ、各機構などの自己点検評価をしっかりと頼みます。
B	評価者：C	自己収入として、産学連携経費の間接経費が主であるような説明があったが、それでは不十分に思われる。たとえば、AROは運営費交付金に頼らず病院予算で雇用すべきだ、というご意見もあったが（岡野委員）、そこまで厳しくやらなくてもよいが、たとえば、治験などによる収入を一部充てることもできるのでは、と思った。
A	評価者：D	2つのブランチの合併が、事実上の事業縮小にならないようにご留意いただきたい。

B	評価者：E	自走化、特に URA に関しては、2023 年度を起点とした人事制度改革や、人員の適材配置などが取り組まれている。自走化のタイムスケジュールも具体的に組まれ 2027 年度にはほぼ運営費支援無しとし自己収入を財源に完全自走化を目指しており計画は素晴らしい。但し、この自己収入は間接経費、知財収入、TIP 会員費などが主たるものとなっており、それらの収入見込みや運営経費の具体的な内訳が示されておらず実装化が見込めるのかが必ずしも明確でない。今後の自己収入の伸び代を TIP 会員費に求めるのであれば、2027 年までの当該事業の取り組み・計画と収入見込みが、より具体的に示されるべきであり、絵に描いた餅とならないことを期待する。
---	-------	--

5. その他、お気づきの点

評価者氏名	コメント
評価者：A	<p>(1) 様々な環境変化を踏まえ計画変更や組織変更も必要となる中で、「URA の強化、及びそれを通じた大学の研究力向上」といった方向性をよく維持し、対応してこられたことに感銘を受けた。また、実績も向上しつつあると認識。</p> <p>(2) 今後は、自走化の実現に向けた一層のご尽力をお願いしたい。自走化計画は現時点のものとしてはわかりやすく、評価するが、運営費交付金支援額を計画通り減らしていくには一層の収入向上努力が必要。ぜひ達成に努めてほしい。</p> <p>(3) なお、東工大との合併に対応してどう URA 機能を再編・整備していくのかも重要な検討課題。</p>
評価者：B	<p>・事業計画に従って、評価委員や学内からの意見などを集約して年毎に改編しながら非常にうまく運営されてきたと思う。新しい機構（統合研究機構、統合イノベーション機構など）への集約化で分かり易くなったし、大型研究や先進医療に関わる臨床研究の発展などに繋がっている。大変にご苦労様でした。TMDU は非常に良くなってきていることを感じます。</p> <p>・毎年申していますが、「中区分 5 7：口腔科学およびその関連領域」における TMDU の採択率の低さは残念に感じます。（学振の資料からですので、貴学がお持ちの数値とは少し異なるのかも知れませんが、H30：52/250=20.8%；R1：65/241=27.0%；R2：72/221=32.6%；R3：49/184=26.6%；R4：57/190=30.0%）（なお他の国立大学歯学部は軒並み 45%程度～以上です）</p> <p>・歯学研究による、厚労科研や AMED などの大型研究費は取り難いので（内容が上手く meet しない）、どうしても（学振）科研費によるから、つい科研費のみが（私の中では）評価対象になってしまう。</p> <p>・TMDU 全体の採択率が 31%~40%（今回の資料 27p）の様ですから、歯学が足を引っ張っているように感じて、歯学の者として残念に思います。</p> <p>・申請数が減少気味なのも気になります（H30：250 件；H31/R1：241 件；R2：221 件；R3：184 件；R4：190 件）</p>
評価者：C	<p>特にありません。統合に向けての意識から、少し辛口の評があったかもしれませんが、皆さん、いろいろと工夫しながらやっておられる点、大変頼もしく思いました。今後、是非、よろしく願います。</p>
評価者：D	<p>TIP (TMDU Innovation Park) の取り組みは、大変素晴らしい。お茶の水周辺のバイオサイエンスのエコシステム形成を期待したい。また、近隣の日本橋周辺のエコシステムとの連携も魅力的な展開である。</p>

	また、東工大との統合に向けて、様々なシステムの最適化を計っていただきたい。
評価者：E	平成 29 年 11 月 30 日発の外部評価委員中間評価結果には、「様々な問題について、改革意欲をもって取り組んでいる姿が窺われるが、力強さに欠ける」とのコメントがある。それは「骨太さが無い」と読み換えることができる。本学は、2002 年より 21 世紀 COE を、2007 年より 21 世紀 COE の事業などを推進しながら、若手研究者育成、外国人留学生の確保、トップリサーチャー支援などの事業を展開するとともに、弾力的な研究体制の構築や組織改編などを実施して経験を積んできている。その上で、本学の強み、弱点をあぶり出して、それらの分析情報を基盤に今回の研究大学強化促進事業（RU 事業）が取り組まれてきているはずである。その成果の一つは、本学の研究力強化の触媒となる人材である URA が人事制度改革を経て 2023 年より独立し機能することである。今後、URA が本学組織の全体を俯瞰しながらも、その研究力、臨床力、TR などにおける特性（強みと弱点など）を調査把握して分析、理解したうえで、本学の研究者あるいは研究グループの活動を活性化させることで一層の成果の達成と成就へと導き、その結果、本学が、力強く骨太の研究・臨床の拠点大学となることを期待します。